くらしは文化 no.60

兵庫県神戸市

神戸税関 本関

Kobe Customs

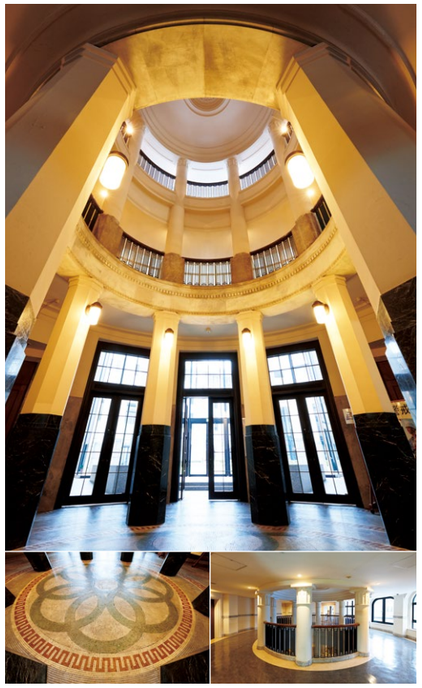
新たな価値を加え
再生された昭和の名建築

兵庫県神戸市の神戸税関本関は平成11年の建て替えに際し、昭和2（1927）年竣工の建物の大部分を保存して、その外観を踏襲する新館を増築。水蓄熱式空調などを採用した環境調和型庁舎として再生した。近代化産業遺産認定、JIA環境建築賞受賞。

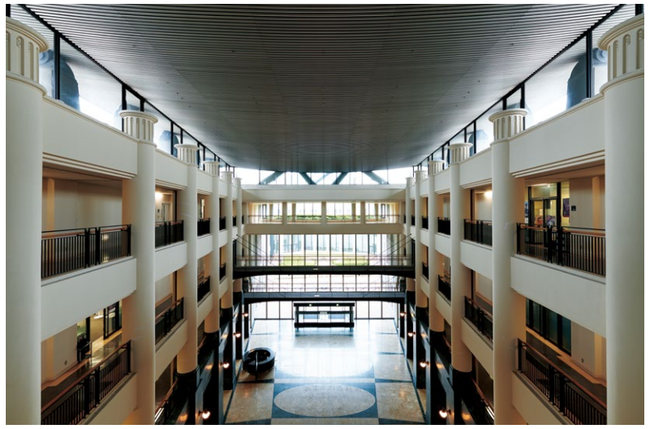
再生された神戸税関。昔日の趣を伝えるかつての正面玄関。写真奥に新館が続く。高層階を操舵室のようなフォルムにし、建物を船に見立てている。

新館側から旧館を望む。第二次世界大戦後、米軍に接収されていた時期もあった。平成になって旧館に新しく作られた広報展示室と中庭は一般公開されている。

新館アトリウムの上にしつらえた高層階には会議室や食堂がある。旧本館中央部（写真手前）は中庭になり、モニュメントとして柱が残された。



塔屋の下に位置するエントランス。セセッション式の八角柱やモザイクタイルを敷き詰めた床、2、3階の美しい回廊が来館者を迎える。



新館5階部分に自動開閉式の高窓が設置され、優しい自然の光が差し込んでいる。1年の中間期には、この高窓を開放することでアトリウムを風が行き来し、自然通風が行われる。

復元された旧館の貴賓室。筒状の建物の形が生かされている。

新館高層階に屋上緑化を採用。植物や土による蒸散や遮熱効果などが多様なメリットを生んでる。

神戸税関の歴史は慶応3（1868）年の兵庫港開港にともなって徳川幕府が開設した兵庫運上所に始まる。以来150年余、神戸港とともに発展を続け、現在に至っている。

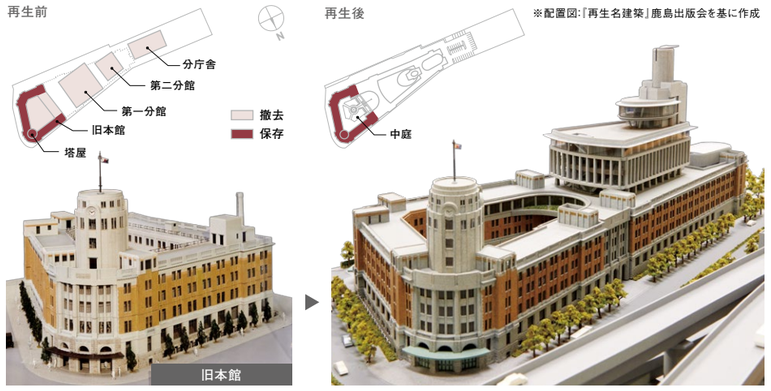
現在の神戸税関本関の母体となる旧本館は、昭和2年に大蔵省営繕部が建設した。官庁にふさわしい風格ある建物に、当時流行していたセセッション式を取り入れた名建築である。建物正面には3面に時計がある8階建の塔屋がそびえ、海上や港で働く人から見える港のシンボルとして親しまれた。

70年弱を経た平成6年に建て替えが決定したが、市民から存続を願う要望があり、大部分を保存する計画に見直された。

旧本館は4階建・ロ字型の建物で、中央部は2層吹き抜けの2階建であった。建て替えでは中央部と西側を撤去。コ字型になった建物の両サイドを延長する形で新館を増築した。新館低層階は旧館に似せたコ字型とし、各階の位置を合わせて旧館に接続。外壁も非常に良く似た色合いで仕上げ、新旧の統一を図っている。

タイルと花崗岩張りのファサードは周辺の歴史的な建物とともに昭和の時代を彷彿とさせる景観を形成している。塔屋や、列柱と回廊が美しいエントランス、税関長室だった貴賓室も残され、貴重な社会資産になっている。

特筆すべきは、地下に冷温水槽を設置して電気による水蓄熱式空調とガス空調の組み合わせを採用したこと、年間約2,000m³の雨水再利用、また、新館5階部分に高窓を設けてアトリウムを利用した自然換気を行っていることなど、環境への配慮を随所に盛り込んでいる点である。こうして、建て替えは修理・保存にとどまらず、時代の要請に応え、次世代へ受け継がれていく再生の取り組みとなった。



※配置図:「再生名建築」鹿島出版会を基に作成

用語説明

【本関】本部や本局などに相当。

【JIA】公益社団法人日本建築家協会。

【兵庫港】神戸港の前身。明治25（1892）年に改称。

【運上所】幕末から明治にかけて各地の開港場で輸出入品の監督、関税の徴収などを取り扱った役所。現在の税関。兵庫運上所は明治6年に「神戸税関」に改称。

【セセッション式】形態及び色彩の単純化をモットーとし、矩形のような簡単明確なデザインが基調。19世紀末、ドイツで起こった革新運動に基づく。

協力:神戸税関 本関
〒650-0041
兵庫県神戸市中央区新港町12-1

くらしは文化 バックナンバー